

## 184. 北宋初期の 白磁碗に関する一資料

### 1. はじめに

従来の貿易陶磁研究の中で、北宋初期から前半期にかけての白磁に関する資料は空白とされてきた。しかしこの間の白磁資料の存在は、北部九州の研究者を中心に80年代後半頃より次第に認識されるようになり、その実態については1987年の鴻臚館跡第1次調査SK-01一括資料の検出により、一気に鮮明化した。その結果、これら北宋初期の白磁群は、山本信夫氏によって白磁Ⅺ類の分類名称を与えられ、従来の横田、森田編年に追加、補充されたが、白磁Ⅺ類に関する九州以外の地域での出土例や、国内における流通の実態などについては、平安京を含め依然不明瞭であるのが実情である。このような中で、野州町内において北宋初期の白磁Ⅺ類に相当する良好な白磁資料が出土したため、今回この場をお借りして若干の紹介を試みたい。

### 2. 資料

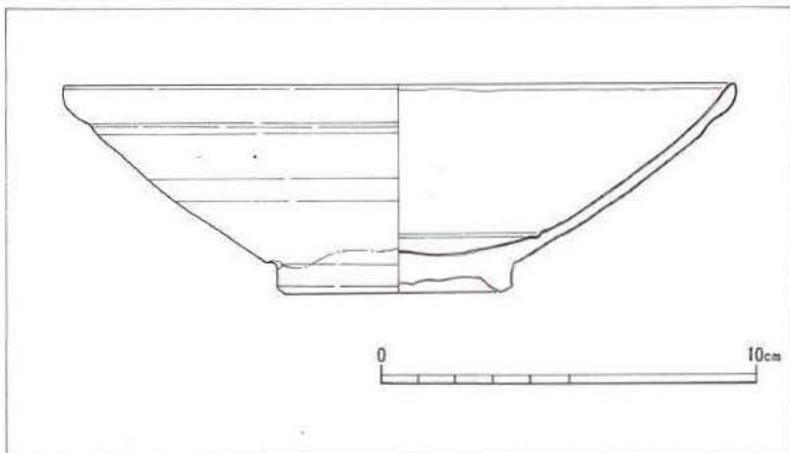
この白磁碗は、野洲町下々塚遺跡より出土した(図1)。遺跡は弥生時代から飛鳥時代を主体とするが、昭和62年の調査では東山道隣接地より多量の平安時代遺物が出土しており、同時期の遺構が存在するであろうことは、以前「滋賀文化財だより」で紹介した通りである。このうち今回報告資料は、野洲病院南側に位置する昭和63年度調査地より出土した。遺物は調査地中央の不整形な浅い落ち込みより出土したもので、共伴遺物は全て7世紀代の年代を示すため、この白磁は混入と考えられる。但し、遺物包含層からは11世紀前後の近江系緑釉陶器なども出土しており、付近に同時期の遺構の存在も予想される。さて出土した白磁碗であるが、体部を4分の3程度欠損しているものの高台部分は完存しており、器形の全容は十分復

元可能である。

まず法量については口径18cm、器高5.5cmを測り、口径に比べ器高が低く、体部が浅く大きく開いていることがわかる。特に体部は器壁も薄く、わずかに内湾しながら大きく開くもので、口縁端部の玉縁は、幅が広いわりに厚味がなく、未発達な外観を呈す。高台は削り出しの輪高台であるが、接地面の畳付と内面を浅く削り出し、外方へ踏ん張る断面逆台形の高台を作り出している。また内面見込みに沿って、幅が狭く深く刻みつけた沈線が一条巡っている。胎土は硬質であるがザラ目で、微黒粒を含む。施釉は高台以下外底面は露胎で、釉は薄く均一に施釉される。釉色は全体に白灰色を呈するが、所々これに明緑灰色が縞状に混じる。特にそのつくりは口縁端部の玉縁を含め薄手で微細であり、全体に丁寧に仕上げられている。体部が深く、器壁の厚薄のコントラストが顕著な北宋後期の白磁碗Ⅱ類、Ⅳ類と比べて趣が異なるのは、一見して明らかである。

### 3. 評価

それでは次に、この白磁碗をどのように位置付け、評価することができるかについて考えたい。まず白磁Ⅺ類の資料については、従来の大宰府出土資料中にも散見することができるが、現在最もまとまって一括に近い形で出土がみられるのは鴻臚館SK-01だけである。特に本例については、SK-01出土資料中に明白な類例が認められる。このSK-01出土資料は現段

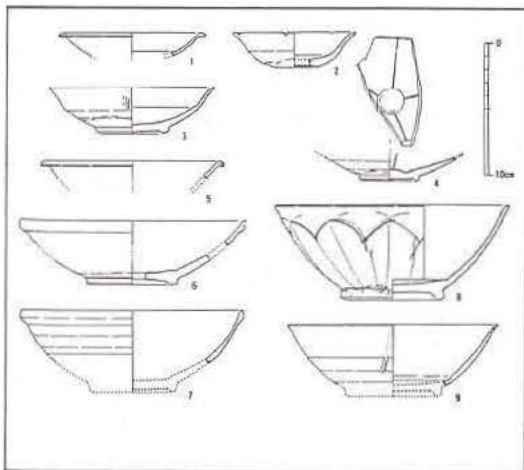


図一 下々塚遺跡出土の白磁碗Ⅺ類

階では未報告であるが、その一部については、第26回埋蔵文化財研究集会などで若干紹介されている<sup>5)</sup>。特にSK-01は、出土遺物の量が多いと共に、その内容も多種であり、きわめて注目すべき資料である。同遺構出土遺物としては白磁Ⅺ類の碗、皿が多くみられるが、同時に五代末から宋初にかけての通常Ⅲ類<sup>6)</sup>と呼ばれる越州窯系青磁碗や、在地の土師器、黒色土器、中国製の貨幣などが出土している。特に後者の土師器、黒色土器については大宰府編年に十分対応可能であり、山本信夫氏はこれをⅩ期(1000年前後)の資料と考えている<sup>7)</sup>。一方本県において北宋前期の白磁は、近江神宮所蔵の白磁縦筋文水注が従来より著名であるが、碗についてⅪ類として認識された白磁は本例が二例目である。というのは本町三上遺跡において、平成元年度圃場整備に伴う調査で、13世紀代の多量の遺物を出した大土坑SX-01出土土器群中より、白磁Ⅺ類底部破片が1点出土しているからである(既報告)<sup>8)</sup>。特に両遺跡とも寺院跡でも重要官衙遺跡でもない一般集落に近い遺跡だけに、今後注意するならば、県内においても類例が増加することは確実である。そして、平安京に地理的に隣接するが畿内ではなく、さらに平安京より東部に位置する近江において、これら北宋初期の白磁資料が今後増加するならば、これまで実態不明とされてきた当該期の白磁製品が、予想外に広域に、そして幅広い階層に受容されていた可能性を指摘することが可能となろう。従って、本例は滋賀県野洲町という一地域の出土資料ではあるが、その意味するところは逆に決して小さくないものと考えたい。

#### 4. まとめ

唐の「茶経」では青磁は「玉」に、白磁は「銀」に類するとされる。特に白磁は青磁に比べて窯数も少なく貴重であったようである。さらに我が国では初期貿易陶磁



図一 大宰府出土の白磁Ⅺ類(註⑦山本論文より転載)

そのものが稀少であり、10世紀以前においては平安京の下級貴族ですら入手が困難な状況の中で、その代替品として国産の施釉陶器、特に緑釉陶器が大いに隆盛をみたことは良く知られている。一方これとは対称的に、11世紀も後半になると輸入磁器は白磁が主体となり、華南の各地方窯産の白磁が多量に日本に流入した結果、輸入磁器は受容層が飛躍的に拡大し、まさに「白磁の時代」と言うに相応しい様相を呈するようになる。この間の一大転機となったのが11世紀の前半期であったが、これまで当該期の輸入磁器の様相が全般に空白であったことは既に述べた。特に日本の窯業生産史の中で11世紀代は大きな転換点の一つであったようで、畿内においては9、10世紀代に隆盛をみた緑釉陶器生産が終焉し、かわって民需主体の瓦器生産が出現するなど、古代的様相が払拭され、中世的な土器、陶器の生産体制が確立していく。この中で輸入磁器の影響は、9、10世紀代においては晩唐・五代の越磁の影響が土器、陶器を問わず幅広い焼物に及んだのに対し、北宋以後の白磁製品の影響は、これらの焼物の中にあまり大きな痕跡を残していない。これは、北宋の白磁製品が前代の初期の貿易陶磁器に比べ比較的入手が容易で、かつ広範囲な階層に受容された結果、緑釉陶器のような国産の代替品をもはや必要としなかったことにもよろう。このことは緑釉陶器生産の終焉背景を考察する上で極めて重要な視点であるが、これまでの知見では緑釉陶器生産の下限はおおよそ11世紀前半頃で、白磁Ⅱ類、Ⅳ類が多量に流入する11世紀中頃から後半頃までの間に年代上の空白期があり、この間の断絶がこのような考えを困難としてきた。

しかし本稿で紹介したように、畿内周辺地域の一般集落において、少量であれ北宋初期から前半期の白磁碗が受容され得る状況があるならば、従来の年代上のギャップを解消し、かつ越磁から白磁への質的転換とそれに伴う受容層の変化と拡大という問題を、これまで以上にスムーズに理解することが可能となる。故にこれら白磁Ⅺ類の分布や受容層の検討は、今後とも注意されなければならない重要な課題であると考えられる。この問題に関して本資料が少しでも寄与することがあれば、筆者としては存外の喜びである。

最後に、小文をまとめるきっかけとなった鴻臚館SK-01出土遺物の実見に際しご配慮いただいた山崎純男氏と、主に大宰府出土資料の実見と白磁Ⅺ類全般についてご教示いただいた山本信夫氏の二氏に、文末であるが改めて深く感謝の意を表したい。

(森 隆)

#### 註

①福岡市教育委員会 「アジアとの交流—鴻臚館跡出土貿易陶磁器—」1990年

- ②山本信夫 「北宋期貿易陶磁器の編年—大宰府出土例を中心とした—」『貿易陶磁研究No.8』1988年
- ③横田賢次郎、森田勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集4』1978年
- ④森隆 「野洲町下々塚遺跡出土の平安時代遺物について」『滋賀文化財だよりNo.124』1988年
- ⑤山崎純男、吉武学 「鴻臚館跡推定地」『第26回埋蔵

- 文化財研究集会—古代の対外交渉第1分冊(資料編)』1989年
- ⑥森田勉 「毛彫文様のある二・三の青磁について」『古文化談叢第6集』1979年
- ⑦山本信夫 「11、12世紀の貿易陶磁器—1980年代の編年研究を中心として—」『貿易陶磁研究No.10』1990
- ⑧野洲町教育委員会 『平成元年度野洲町内遺跡発掘調査概要』1990年

## 185. 近江における 最古の横穴式石室

### 1. はじめに

近江地域における横穴式石室の導入は、大津市大通寺3号墳・四郷崎古墳が最古の横穴式石室とされ周知されている。ところが、近年、実見した大津市飼込16号墳が大通寺3号墳に先行することが明らかとなったため、本誌上にその根拠と位置づけを再確認したい。このことは、渡来系氏族の墓域とされる志賀古墳群の成立・展開をめぐる特質と横穴式石室の導入を解明するための重要なポイントと考える。

### 2. 飼込16号墳の概要

この古墳群は、大津市北郊の京阪電鉄穴太駅西方に近接しており、比叡山麓に源を発する四ッ谷川によって形成された扇状地上に立地する。現在のところ古墳45基が確認され17基が発掘調査されている。飼込16号墳は、昭和53年に老人ホーム建設に伴う事前調査で14・15・17号墳と共に調査されている。扇状地の緩斜面に14～16号墳が存在するが、石室は保存状態がきわめて悪い。16号墳は、玄室幅1.81m×残存長1.32mで玄室半分と羨道は削平のために存在しないが、片袖式の縦長方形プランを呈する横穴式石室と考えられる。石室は、根石に比較的大型の石材を使用し、2・3段になるにつれて、若干小型の花崗岩石材を積んでいる。出土遺物は、玄室床面より、須恵器の杯3点・蓋2点・広口壺1点・埴1点、土師器の長頸壺1点、木棺釘12本が出土している。報告書によると出土状態は、「石室東北隅において奥壁と接して、東から西に向って須恵器の広口壺、土師器の長頸壺、須恵器の埴が正位置で出土。また、東側壁にて須恵器の蓋・杯3点が集中してみられた。木棺釘は、石室左側に多く出土している」と云うことであり、玄室の左側に木棺が安置され、右側に土器の副葬があることが窺える。造墓時期は、出土須恵器杯・蓋の法量や形態の特徴から陶邑TK47型式に比定されよう。特に8点の副葬土器も単一時期であり、片づけ等が出土状況に見出せないことから、

この石室へ埋葬が初葬のみである可能性が高い。

飼込古墳群は、昭和43年度に横穴式石室を内部主体とする円墳群が13基、昭和53年度に4基の計17基が調査されている。前者は未報告のため、詳細な時期は不明であるが、ミニチュア炊飯具が1～5号・10・13号墳の7基から出土している。後者は、飼込15号墳が陶邑TK10型式の須恵器から16号墳に続く造墓時期と考えられる。17号墳は、陶邑MT85～TK43型式に比定される。また、ミニチュア炊飯具は、15号墳より1組が出土している。しかし、副葬土器がTK10～TK209型式までの幅があり、その所属時期は決定し難い。

### 3. 横穴式石室導入期の様相

導入期の横穴式石室は、3タイプの石室様式に大別される。A類は、片袖式の縦長方形プランを基調とし、箱形の玄室と羨道を有するもの。B類は、両袖式あるいは片袖式を呈し、玄室が方形プランをなし、側壁の持ち送りがきつく、天井石を1～2石とするもの。C類は、縦長方形プランの玄室と羨道の境に階段状の落差を有するもの。したがってA類は、6世紀前半に通用に認められることから、畿内型横穴式石室、B類は、方形プランを呈し、畿内に少数類似するものが認められるが、志賀古墳群にその典型を多数みることができることから、志賀型横穴式石室、C類は、従来階段式又は横口式石室と呼称されていたもので、いわゆる堅穴系横口式石室である。

飼込16号墳は、A類の最古のものと思える。その系譜は、隣接する野添21号墳(MT15型式)、飼込15号墳(TK10型式)にその流れを認めることができる。これらは、玄室石材が根石も含めて、小振りのものを多く使用している。共に片袖式の形態が踏襲される。B類には、従来、最古とされた大通寺3号墳があげられる。玄室が5.1m×3.4mの大型で副葬品も馬具や子持装飾壺などを副葬している。造墓時期は、陶邑MT15型式であり、湖北町四郷崎古墳の石室も細部は異なるが、同タイプに含められる。天井部は残存していないが、石室上半に大振りの石材を用い持ち送り、1～2石の天井石も用いるものと推察されている。後続するものに磯崎2号墳(陶邑TK10型式)があげられる。

この形態のものが、MT85~TK43型式（6世紀後~末葉）に多く認められるタイプに続く。

一方、湖東を中心に分布する竪穴系横口式石室は、上蚊野5号墳（TK10型式）を上限として、MT85型式以降に亀石山2号、三ッ山古墳群などがあげられる。これらの特徴としては、玄室が片袖式を呈しており、北九州のタイプと区分されよう。

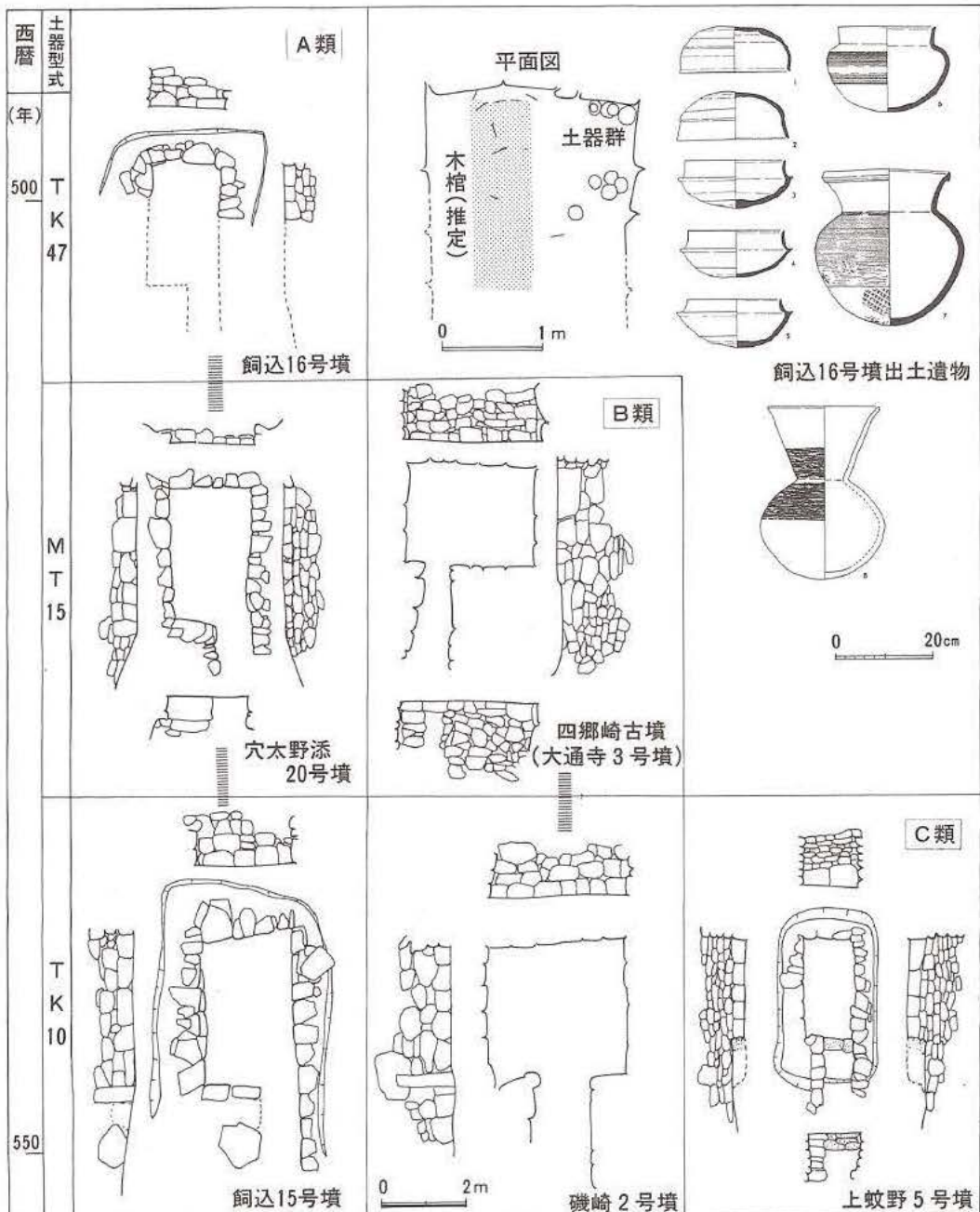
このように群集墳内に認められる大通寺3号墳・四

郷崎古墳を除くと全て、横穴式石室を内部主体とする小円墳の埋葬法として導入されている。

(花田 勝彦)

謝辞 吉水真彦氏に飼込16号墳の出土遺物を実見する機会を賜った。記して感謝したい。

註① 吉水真彦 『滋賀里、穴太地区遺跡群発掘調査報告書II』 大津市教育委員会 1982



近江における導入期の横穴式石室の変遷